

青丘文庫研究会 月報 No.240

2010年2月1日

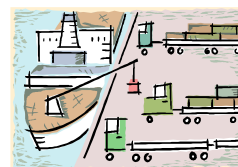
青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)
 朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
 郵便振替 <00970-0-68837 青丘文庫月報> 年間購読料 3000 円
 他に、青丘文庫に寄付する図書を購入費として 2000 円 / 年をお願いします。

< 巻頭エッセイ >

エネルギーたっぷり「浦項(ポハン)」の魅力 足立 龍枝

恋い恋いし 迎日(ヨンイル)湾の この海に 育てられたる わが少女期は

1990年刊行された歌集「迎日(ヨンイル)の海」の著者、廣岡富美さんは大邱で生まれ、3歳から解放まで13年間、迎日湾を眺めながら育った。いわば浦項が故郷。しかし、日本に「ふるさと」がないからといって、朝鮮「浦項」を安易に「ふるさと」と呼んではいけなと自分に言い聞かせている人だ。



2年前に、浦項市は、漁港九龍浦(クーリョンポ)に残る日本家屋を保存し、観光客を誘致する方針を打ち出し、ネットで盛んに取り上げられるようになった。日本統治時代の「つらい過去」にも連なる敵産家屋を保存することによって、延々とその時代が続いていくことに疑問を持ちながらも、建築上意味のある日本家屋だということなので、とりあえず評判のいいIPR誌「九龍浦の日本人」を手に出かけた。

九龍浦は、1902年の山口県の漁船の出航に始まり、1933年以後には、移住所帯数が220所帯、半数が漁業従事者で、その3分の2が香川県からの移住漁民。「香川村」として定着していったところである。

偶然訪れたその日(2009年6月末)から4回シリーズで、「韓国に残る日本家屋」が新聞で連載され、1回目が九龍浦だった。2009年、九龍浦だけでなく、ポスコ(元浦項製鉄が2002年から社名変更)歴史館、韓国で日の出が最も早いという虎尾串(ホミゴツ) 廣岡さんが住んでいた日本統治時代の中心部を歩き回った。東大邱からの鉄道支線である大邱・東海南部線の終点が「浦項駅」。廣岡さんは鉄道完成のとき、女学生の奉仕活動で道路の馬糞拾いをしたという。時代を感じる。私の住む吹田の産業道路でも50年代にはまだ馬車が荷物を運んでいた。

ポハン駅からのメインストリート中央商店街は今も健在だ。そんなに広くない道路の真ん中に水を流し、夜のイルミネーションがきれいだった。中ほどにある郵便局は日本時代のままだ。通りから抜け出たところにあった市庁は、5年前に移転し図書館に、浦項神社跡は教会になっていたが、廣岡さんの通った国民学校の少し先、北部市

場の周りに小さな日本家屋が軒を並べていた。ポハンは朝鮮戦争での被害がなかった
ので、統治時代の日本人街を想像することができる。東浜湾沿いの富山県の移住漁村
跡はまだ歩いていないので分からないが残っていないと聞く。

今では想像もつかないが、街の南の方は一面湿地、東海岸最大の「竹島市場」あた
りは、塩田の跡だそう。廣岡さんの母校、ポハン高女に行く手前に最近ロッテデパ
ートが建ったが、桑畑の続く中を港に向かっての鉄道の引き込み線が未完成に終わっ
たところである。東海岸沿いには、敗戦で工事が中断された鉄道の跡が北に向かって
かなり残っている。

駅前の観光課のアジョシ金さんは、案内所を戸締めして2時間付き合ってくれた。
東大邱から列車が2・3回到着するはずだが.....「クエンチャナヨ」韓国の地方都
市らしいのどかさだ。元市庁を中心に半径1キロぐらいの中にポハン市(当時ポハン
邑)が作られていった。

道路に取り入れられたロータリーの名残りが、中心の島の部分が取り外され、オゴ
リ(5差路) ユッコリ(6差路)と呼ばれている。旧市内をサイクリングで回れば
興味あるコースになりそうだ。

翌日「ホミゴツ(虎尾串)」に行ってみた。「ホミゴツ」は10年ぐらい前までは「チ
ャンギゴツ(長ギ串)」、日本時代は「米が鼻」、朝鮮時代は「冬之背串」と呼ばれた。

虎が東海を背にして立ち上がっている姿が朝鮮半島に似ていると言われる。尻尾の
付け根の東側が九龍浦で、尻尾の先が「ホミゴツ」と言うわけだ。偶然だったが、そ
の日は広場にできた「新千年記念館」のオープン式。日本人の変なのが行くと連絡が
ついてきたようで、市の観光課の人たちに親切に対応してもらえた。

「ホミゴツ」までは、九龍浦から景色のいい東海岸沿いをタクシーで走って14,
550ウォン(約1,300円)観光課の2人から「いくらかかりましたか」「メー
ターで来ましたか」と、同じことを聞かれた。実は550ウォンまでもらったのだ
が.....

「クリーン浦項」を全国に広めていくために、少しでも浦項市のお手伝い(新しい韓
日交流の輪を広げる取り組み)ができればと、今年も浦項に足を運ぶことになるだろ
う。

第315回在日朝鮮人史研究会(2009.11.8)

戦前・戦時下の福井県の在日朝鮮人の諸相 人絹織物・失業問題

砂上 昌一

福井県の在日朝鮮人の諸相として特徴的なことのひとつに織物産業との関連がある。福井県
の主要産業が繊維産業であることは衆知のことであるが、その繊維産業の中でも人絹織物の発
展を朝鮮人職工が下支えしていたことはあまり知られていない。戦時下において労働力不足に
なると朝鮮人職工の数は急激に上昇していく。福井県内の機業は福井市を中心に春江、丸岡、
上志比に集中していた。

1920年代後半から特に昭和恐慌になると福井県の繊維産業の中心は絹織物から人絹の変わ
った。それは生糸や綿糸の価格低迷や輸出の減少によって羽二重などの絹織物の価格が低落し
たからである。代わってレーヨンの発明によって輸出用の人絹が大幅に増加し県内の機業場は

人絹織物に転機していった。このような人絹織物の盛況は朝鮮人職員の需要を招いた。低賃金で雇用できる朝鮮人職員は日本人職員の労働力不足を補うものであった。近郊の在所から通勤する農村女性は季節によって離・転職するので機業主にとって朝鮮人職員は安定した労働力であった。1930年には「県内の絹業界は人絹が七割、天絹が三割」(『福井新聞』1930・5・10)までになり朝鮮人職員の求人が増加した。



34年11月17日付の『福井新聞』によると織物産地であった福井市、足羽郡・吉田郡の在日朝鮮人の職業別調査では男性966人中「土工」が733人と7割強の多数を占めていた。次は「屑買・拾い」の78人であった。女性は596人中「織物工」が528人と8割強であった。この地域の在日朝鮮人女性の多くが人絹機業場の職員として就労していたことがわかる。ここに福井県の在日朝鮮人女性と人絹織物の密接な関係がわかる。

内務省警保局の在日朝鮮人職業調では31年には県内の職工数が430人であったものが33年には1千人台となり36,37年には二千人を超えるまでになった。戦時下入っても42年にはまだ1千二百人の朝鮮人職員がいた。

この人数は福井県でも嶺北地方の繊維産業地帯に集中していた。このような人絹織物も37年ころには人絹織も暴落し満州への輸出も低迷し不況にあえぐことになった。38年には戦時経済統制下に入るとますます深刻な状況となった。再び絹織物に転業するものもでてきた。

人絹機業に就労した朝鮮人職員は低賃金、長時間労働など労働条件は劣悪であった。機業主は最初から低廉な労働力として日本人職員の代替でもあった。30年代のこの地方の農村女性の多くは「女中」などの仕事に就くことが通常なことであった。しかし、賃金が上がると自宅から機場に通うことができるようになると、多くの日本人職員も機場に就労した。

一方、第一次大戦の戦後景気から急激に日本は不況に突入した。不況のともなって失業問題が深刻し、それに対処するため25年から28年度にかけて政府は6大都市を中心に公共失業救済事業を実施した。

この公共救済事業を当てに朝鮮半島から大量の朝鮮人が渡日してくるようになった。このため、日本国内の失業者の就労を狭めるということで25年には渡航制限が実施された。すなわち朝鮮人渡航者の増大が日本人失業者の就労の機会を奪い狭めることになるというのであった。朝鮮人失業登録者は大阪市・神戸市を除いて京都市・東京市・横浜市・名古屋市などではその人数は過半数を占めるようになった。

28年には全国の失業者は10万人を超えた。福井新聞(28・4・22)には「不況で所々流転すものあり」との見出しで在住の朝鮮人が低賃金で粗衣粗食の生活を余儀なくされていると在日朝鮮人の近況を報じている。このころから不況に関する記事が『福井新聞』紙上でも多く散見されるようになった。

29年から31年度にかけて第2期に失業救済事業が実施されるようになった。これまでの大都市中心の救済事業では対処できないほど国内の失業は深刻となった。福井市、金沢市なども失業救済を要すべき都市に入り、一般公共事業を失業救済事業として実施することができるようになった。公債発行して事業が実施できるようになると国道、県道などの改修工事が本格化した。このような失業救済事業のよって朝鮮人労働者が救済されたわけではなかった。政府は救済の主眼を日本人労働者におき救済の認定については朝鮮人労働者には厳しい条件が課せられるようになった。居住期間を三月以上、戸籍謄本、貧困証明書の提出、扶養家族の有するものなどの制約が加えられた。これらの制約は朝鮮人労働者にとっては就労の制限となって次第に公共失業救済事業から排除されるようになった。また、朝鮮人労働者の就労日数なども

日本人労働者が20日以上対して10日から14日であった。

失業状況が一向に改善されないため政府は31年から34年度にかけて3期の時局匡救事業として国道、府県道の改修と農村振興の土木事業など実施した。福井県庁には朝鮮人労働者が大挙して救済事業に就労させよと詰め掛ける事態のまでとなり地方都市にも朝鮮人の失業問題は深刻であった。(『福井新聞』31・9・12)また、福井市役所にも200人あまりの朝鮮人労働者が職を与えよと押しかけていた。(『福井新聞』33・2・26)この頃には救済事業の登録制度が厳しく制限され、扶養家族を抱えたものに登録をしぼった結果、単身で渡航してきた朝鮮人求職者などは土木救済事業から排除されることになった。

福井県内の失業者推定者数が最高になったのは32年2月1日の6,089人でこれは失業救済事業が4箇所ですべて完了したことが要因であった。また、製糸工場の閉鎖などによって9月1日は5千9百人台となったが、12月1日の調査では4千人台と若干減少した。その後35年7月末の調査終了まで4千人5百人台で推移していた。

県内の朝鮮人失業者推定数について見てみると、33年8月1日には860人で35年7月末まで8百人台であった。33年8月からの県内の日本人失業者との比率でいえば17%から19%であった。

このようにみれば県内の公共土木救済事業によって朝鮮人失業者が特段に救済されていたわけではなかった。朝鮮人労働者の失業問題が社会問題として意識されていたのは在日朝鮮人集住地の6大都市などのことであった。

なお、内鮮融和団体や朝鮮飴売については紙幅の関係で述べるができなかったことをお許しください。

青丘文庫研究会のご案内

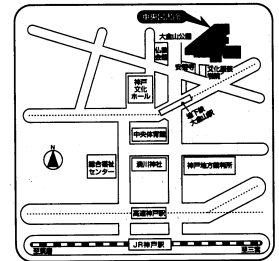
在日朝鮮人運動史研究会関西支部会 お休み

第271回朝鮮近現代史研究会

2月14日(日)午後3時~5時

「朝鮮戦争~内在的アプローチ」 李景珉

会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



【今後の研究会の予定】

2010年3月14日(日) 報告者未定。研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1~5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセーの予定】

3月号以降は、安致源、石黒由章、伊地知紀子、宇野田尚哉、太田修、小野容照、梶居佳広、高正子、斉藤正樹、坂本悠一、砂上昌一、高野昭雄、全淑美、塚崎昌之。よろしくお願ひします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

・金慶海さんを偲ぶ会が先日開かれました。著作目録、新聞記事を少し整理して当日配布しました。ご希望の方は、飛田 hida@ksyc.jp までご連絡ください。